



武蔵野美術大学
Gin Johannes

「無重力都市ではなく、相対的空間」

PROFEEL
2006 Musashino Art University, Special Lecturer
2003 Pratt Institute New York, Visiting Critics
2001-2002 Guest Professor, Ming Chuan University
1994-1995 Graduation AA School of London, Unit/Cedric Price
1993-1994 Unit/Nico Grimshaw, Richard Rogers and Michael Hopkins
1991-1992 Unit/Ron Herron
1991-1995 Diploma course, Architectural Association school of London
1988-1991 Musashino Art University, Department of Architecture
Since 1989 Gin Johannes Studio
1988 Born In Japan



左 セカンド・ムーン「第2の月」起動エレベーター・プラン 右上・右下 セクション

Q. 卒業設計のコンセプトについて

A. 宇宙建築。軌道エレベーターの構造・空間をビジュアル化した。とっぴょうしもない思考の組み合わせのドローイングを見てほしかった。静止軌道（重力を制御する安定するポイント。長い軌道で地球と一緒に動く）で、張力構造によるデザイン。スペースシャトルの現在の宇宙ステーションでも良かったかもしれないが、より安定している都市的な大規模空間を考えた。

Q. 卒業設計のデザインについて

A. 無重力空間での構造論からくるデザイン。空気のないところに空気をいれるとパン！と破裂する。その張力を利用する。蜘蛛の巣の巨大曼荼羅のようなシステムで、WHISKER（「猫の髭」の意）という繊維の化学構造。当時から今までも、サスペンション構造のカーボンウィスカーは超強いと言われてきた。それを用いた。

Q. 宇宙建築というテーマを選んだことについて

A. 学生時代が特殊で、卒業設計以前の課題で地球上に普通に建つものを作らなかった。既存の構法を拒否しつつ、自分の設計したものが地球に根付くことはないと思っていた。宇宙建築、つまり完全に無重力の中での建築、そこに永住することを考えたとき、人間が進化してしまってもいいという姿勢でのぞんだ。倫理的に、それはどうかという人もいるけれども、それさえ壊してしまう。テーマそのものに対しての申す、という感じで、アンチテーゼであり、社会的にネガティブなものさえも加速させてみせてしまう提案。もう一度文明やりなおせ、というくらい地球の最期の建築、究極の建築を描いた。

Q. 当時、影響を受けた建築家について

A. 影響というか、ヒントになったのは、バックミンスターフラワー。フラワーの場合は

気圧で風船のように膨らませたものなのでまた別の話だが、彼の、モダンな流れにのっからない、自分で組み立てていく異色の発明家的な感じには影響を受けた。

Q. 当時、考えていたこと

A. テクノな流れを汲んで、かなり飛躍しているものを衝動的に埋めていくこと。武蔵美にいて、美術の中で建築をやる、ということ。とっぴょうしもないテーマを選んだ者勝ちなところがあった。当時、クーブヒメルブラウなどのデコンの人たちが台頭し始め、その余波が充満していて、それに感化されて無理して新しいことをやるのが普通だった。また、留学を控えていたということも大きい。留学して、どの国の誰につくか、自分はどこまでやれるのか。日本からのりこんで、技術的にはなくて、何をするのか、ということを考えていた。

Q. 学生時代の活動と卒業設計の関係について

A. 超越していくこと、プレゼンを編み出していくこと。トータルで自分流のテイストをだす、プレゼンというか、絵を描く。そこでシルバー系の色や自分の表現方法を使い込む。卒業設計でも同じで、それができてなきやアートスクールの卒計とはいえない。だから発想から勝負だったし、建築のドローイングもかっこよくなきゃ、だった。超テクノな表現力もめざした。写真一つとっても、テクニックやタイミングの技術だけではなくて、プラスアルファの実験写真やコラージュの芸術力を必要とした。

Q. 現在、興味のあること

A. 映像や音楽など早業的な表現も手がける。そのなかでも建築は長いスパンで考える。練って練って練って壮大なもの。ダンスも音楽もフィルムも「空間のゆがみを追求したい」という模索状態にあり、卒業設計からも通じている。根っからミニマルで整理さ

れたものを嫌い、それよりも実験的でキャッチー、妙でアグリー、を好む傾向にあるよなあ。常に最新の建築を打ち出すことによって「トライ」すること。できない部分があっても次、と言う姿勢。建築家は、芸人やミュージシャン同様、コンテンポラリーな表現者の一人だ。提案も力量のうち。学生の当時はさまざまなものをどういふふう融合させようかを考えていたが、今はそれさえとっぴょうしようになった。戦略はいらぬ、考えない。どれかが急にすすむときがあつて、それに意識はいらぬ。もっとフリーにやることを考えている。

Q. 現在の活動について

A. 地球でゼリーアーキテクチャーからの続編。僕流で、より複雑なものをどういふ素材でクリアできるか。技術的に難しいもので、できたものも何じゃこりや一って感じのもの。いかにぶっこわすか、つきあげるか、パンク的な要素がないと絶対ダメ、壊す要素をやるんだよ俺は、といいたい。

Q. 今の学生に伝えたいこと

A. 日本国内にとどまっていなくて、海外へ出てみる。それも、先進国以外の国へも行く。リスクではあるが、日本人としてのあり方を考えさせられる。辺鄙なところに行ったときにどこまでやれるか、どこまで結果をだせるか、頑張っしてほしい。



2005年 ゼリーアーキテクチャー